

淡路島日本遺産の活用と「鳴門の渦潮」の世界遺産登録に向けて

浅井伸行

一、はじめに

わが国最古の歴史書『古事記』の冒頭を飾る「国生み神話」をご存知だろうか。伊弉諾命いざなぎのみことと伊弉冉命いざなみのことによる天地創造の神話の中で、最初に誕生する島が淡路島なのである。その背景には、巧みな航海術や豊かな食糧で畿内の王権や都の暮らしを支えた“海人あま”と呼ばれる海の民の存在があった。また、畿内の前面に浮かぶ瀬戸内海最大の島は、交通の要所でもあり、古代国家の形成をさまざまな面から支えた島なのである。

二、淡路島日本遺産について

淡路島日本遺産において、二つの特徴があげられる。一つは、歴史を活かした地域づくりにおいては、調査研究が非常に重要である。そのため、認定当初から古代国家を支えた海人についての調査研究事業を淡路市教育委員会が主導し、ひょうご歴史研究室と連携して行っており、事業成果の公開としてシンポジウムを開催している。この連携事業は次年度も引き続き進める予定である。

二つ目は、官民が連携した取り組みであることである。淡路島日本遺産委員会は淡路青年会議所が主導し、淡路島観光協会・淡路島くにうみ協会・兵庫県淡路県民局・教育委員会を含む淡路三市により組織されている。

全体の活動については、「淡路島日本遺産の活用」『ひょうご歴史研究室紀要 第四号』、「淡路

島日本遺産の取り組み」

『ひょうご歴史研究室
紀要 第六号』をご覧

いただき、ここでは、

南あわじ市の取り組み
について、ご報告する。

南あわじ市では、歴
史に関するイベントは
残念なことにはほとんど
開催されていなかった。

しかし、平成二七年の

松帆銅鐸の発見や平成二八年の日本遺産認定を契
機に、市民がふるさとの歴史文化遺産に触れ、体
験し、学ぶ楽しさや郷土愛の醸成を図る機会や環
境をつくり出すことが必要と感じた。特に子ども
は高校卒業後進学のため島外に出してしまうが、幼
少期から地域の歴史文化遺産に親しむことで、ふ
るさと思う心を育み、ふるさとに誇りを持って
もらおうという考えに至った。教育振興基本計画
のテーマも『学ぶ楽しさ日本一』と定めて、現在
様々な育成や推進が行われている。



淡路島日本遺産の構成文化財三一件のうち南あ
わじ市は一二件あり、埋蔵文化財七件、文化財五
件となる。埋蔵文化財七件のうち、五件が弥生文
化を象徴する青銅器関連資料であり、南あわじ市
の弥生時代を特徴づけている文化遺産である。ま
ずこれらを使い、ミニチュア鑄造体験のワークショッ
プを開催している。材料は現在のものであるが弥
生時代と同じ作り方を体験し、青銅器が当時の最
先端技術であること、それらが南あわじ市で多く
発見されていることを知る機会としている。鑄造
体験は小学校中学年からの体験であるため、未就
学児童や小学低学年には、銅鐸などの絵に塗り絵
をする缶バッチ作りや、粘土で銅剣などの消しゴ
ムを作るワークショップを実施している。また、
レジンを使つての銅鐸や銅剣のアクセサリー作り
は、歴史に興味のない人にも人気である。ここ二
年は新型コロナウイルスの影響で中止となつてい
るが、他の団体にも協力いただき「淡路島古代フェ
スティバル」と銘打ったワークショップや歴史遺
産関連グッズ販売のイベントを開催している。そ
の際には、貫頭衣と勾玉を身に着けた当市のゆる

キャラであるゆめるんが登場する。普段はおくるみを着たゆめるんであるが、銅鐸を二個ぶら下げ、赤ちゃんではなく古代の人となる。物を作るワークショップは人気があるので、歴史文化遺産をモデルとした新しい体験を模索しているところである。

松帆銅鐸の発見がきっかけで発足した南あわじ市歴史を活かしたまちづくり実行委員会では、松帆銅鐸はもちろんだ、日本遺産構成文化財などの歴史文化遺産を活用し、海水からの塩作りや歴史遺産ウォーク等ふるさとを知る学習会などを開催している。

十二月には、江戸時代終わりに始まった珉平焼を基とするダントー・タイルの工場見学会を行い、日本で二番目に株式会社として登録されたことや、点字タイルから装飾性の高いタイルを生産



していることなど、当市が世界に誇る地元産業を学べる機会となった。

このように、淡路島日本遺産認定を契機として、達成にはまだまだ時間が必要ではあるが、郷土愛醸成への活動を行っている。

三、「鳴門海峡の渦潮」の世界遺産登録に向けた取組

瀬戸内海最大の島である淡路島と四国の間にある鳴門海峡に発生する「鳴門海峡の渦潮」は、潮の干満によって約六時間ごとに海水が高い海から低い海へ流れる時に生じる現象で、瀬戸内海と太平洋との間で生まれる大きな潮位差によって生じる類まれな自然美である。一年で最も潮の干満の大きくなる春には潮流は時速三十キロメートルになり、うずの大きさも三十メートルと世界最大級であり、古来より島民をはじめ観光客等多くの人々を魅了してきた。

鳴門海峡を挟んだ兵庫県と徳島県、南あわじ市、洲本市、淡路市と鳴門市が連携し、この鳴門海峡

の渦潮を後世に残して
いくため、平成二六年
十二月に「兵庫・徳島
「鳴門海峡の渦潮」世
界遺産登録推進協議会」
(以下「協議会」)を設
立し、渦潮の世界遺産
登録という大きな目標
に向け、取り組んでい
るところである。この
協議会のほか、兵庫県
側では「うず潮を世界遺産にする淡路島民の会」
や、「うず潮の世界遺産登録を推進する淡路島議
員連盟」が設立され、淡路島を上げて登録へ取り
組んでいる。

協議会では、世界に誇る鳴門海峡の渦潮につい
て、世界遺産の登録を推進し、人類共通の財産と
して、より一層地域の関心や愛着を高めるととも
に、ふるさと資源として保全と活用を行い、地域
の活性化につなげ、渦潮の普遍的価値を明らかに
するため、南あわじ市は学術調査、鳴門市は文化



調査と役割分担し、渦潮の地形調査や景観調査な
どの学術調査を行っている。また、渦潮の魅力を
内外に広く伝えるため、国際シンポジウムの開催
や各種広報活動など、民学官が一体となった普及
啓発活動を実施している。

南あわじ市では、渦潮が発生するサルストラウ
メン海峡を有するノルウェー王国のボーダ市と、
観光や産業面での交流を図ることを目的とし、令
和二年十二月に友好協定を締結し、世界遺産登録
に向けた連携協力を行っている。

同じく令和二年度より、淡路島の渦潮関連の文
化財調査を、兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研
究室が担当することとなった。この研究調査は、
淡路島全域から鳴門の渦潮との文化的価値を見出
すためのものであり、調査には淡路島三市の教育
委員会も協力している。また、近い将来発生する
確率が高い南海地震で八メートル以上の津波が来
ると予測される福良地区では、福良に関すること
を何でも学び、知り、親しみ、伝え、郷土愛を育
む教室活動を行う福良学教室のメンバーとも交流
を行い、福良地区での津波研究を進めている。

今年度には、平成八年に兵庫県立歴史博物館が行った采女調査データの整理作業中に、これまで見落とされていた渦潮に関する文化財史料の再発見という新たな展開もあった。

淡路島発祥と言われる人形浄瑠璃は、徳島藩主の庇護を受けていたこともあり、徳島でもよく上演されていた。現在人形浄瑠璃を常時上演する専門集団が南あわじ市と鳴門市にはあり、人形師（人形の頭を作る職人）も徳島には多く、文化的交流は現在でも続いている。



四、おわりに

約一〇三〇〇年前に紀伊水道から鳴門海峡を通過して播磨灘への海水の流入が始まり、それまでの景

観は一変する。約九七〇〇年前に明石海峡を經由する大阪湾と播磨灘間での海水の流入が始まり、結果、鳴門海峡に強い潮流が生じ、渦潮が誕生するわけである。渦潮の発生時期は不明であるが、九七〇〇年前と言えば縄文時代早期であり、渦潮の誕生を目の当たりにした人々がいたことを考えると、渦潮はこれからも進化し、人々とともにあり続けるのである。

このような地域文化財を活かしたまちづくりは行政が表立って進めることが多いため誤解されやすいが、活動を担う主役は地域住民である。行政はその仕組みづくりをサポートし、持続可能な取り組みへとつなげることが役割と心得る。成果が実感できれば持続は可能と考えるが、なかなか結び付かないのが現状である。その上、新型コロナウイルスの影響は大きく、成果の情報発信の場であるイベントへの参加や歴史の勉強会は大きく制約を受けている。様々な方面でもそうであるが、これまでとは違う手法を模索していくことが今後の課題である。